

プーシキンの詩にみられる副動詞の異形態 — 韻文の語学的研究に際するクリテリアに関連して¹ —

§1 語学の論文は書き手と読み手との間にその言語についての共通の知識を必要とする。文学の論文の場合にはそのような知識は望ましいものではあっても、必ずしも必須の条件という訳ではない。従って必ずしも言語の知識を持たない読者を対象に語学的なものを書くというのは、一般に不可能に近い(ただ言語についての予備的な知識の量を極力少くするように努めるということは可能であると思われる)。ここで試みるのも差当りはその程度のことでしかない。最初にお断りしておきたい。

さてプーシキンがロシア文学の最も高い峰を形造っていることは今更述べるまでもないことであるが、このことは現実に彼の作品に接することによって実感される。ここでは彼の詩作品に話を限ることになると、彼の詩を読んでそのように実感するのは何によってなのか、が問題となる。そこには彼の思想の問題もあろうし、モチーフの問題もあろう。また彼の創造した形象の問題もあろう。これらについて扱うのは文学の領域に属することであろうが、これらすべては偏にロシア語という言語を通じて行われているのである。してみれば、それはロシア語のどのような使用によってそれが行われているのか、が問題となって来る。それは原則として語学の領域に属するものであるに違いない。しかし語学がこれらすべての問題に答えることができるかどうかということになれば、答えは否定的である。語学と文学の緊密な結合が必要だからであり、現状はそのような理想から未だほど遠い所にあるからである。

したがってここで試みようとするのはロシア語にある小さな現象をとり上げ、それがプーシキンによってどのように使用されているかを考える、というささやかなものでしかない。

§2 詩に限らず、すべての文学作品は、一定の意図と構想のもとに作られている。そしてその作品がすぐれたものであればあるだけその作品に含まれている一字一句がすべて作品の意図によって方向づけられていると考えられる。もしそうでなければその文字、その語句は作品にとっていわば余計な、冗長なものになってしまうからである。

このような作品の意図による方向づけは、そこに用いられているすべてのレヴェル、即ち文のレヴェル、語彙のレヴェル、形態のレヴェル、あるいは音韻のレヴェルに至るまで、貫通していると考えられる。そうであることによっては一はじめて作品は一個の緊張関係を内

¹むうざの会において報告したもの。日付不明。

包した構造体として現象するのである。これが作業仮説の第一である。

このような作品の意図による方向づけ — これを仮に「意図化」ということにすれば — は、当該言語の要素のそれぞれに固有の潜在的な可能性を利用することによって得られる。たとえば語彙のレヴェルでこれを考えれば、同義語の群である。一般に言語主体が何事かを描写しあるいは表現しようとする時、その内容に対応する語彙はただ一つに定まってはいる。一連の同義語が対応しているのである。言語主体はこの群の中から、自己の表現の意図に最も適合していると思われるものを一つ選択し、これを使用するのである。

これを選ばれる同義語の方から観れば、それぞれの同義語が潜在的に持っているニュアンスのうち、最も表現の意図に適合していると思われるニュアンスを持つ語が選ばれるということになる。これらの同義語の群は知的意義においてはほぼ同一であるとみられるから、このような選択は知的意義を等しくする複数の形式が存在する時には常に行われると考えられる。

このような選択は他方すべてが意図化によるものばかりとは言えない。個人的な癖あるいは好みがここに働くことも又極めて多いと考えられる。個人的な文体の誕生である。従って言語の要素の潜在的可能性は何よりも文体的な契機として働くということができる。

この故に文体論の観点からであれ、作品の意図を論ずる作品論の立場からであれ、ある語彙が何故当該の文脈において選択され使用されているかを問うことは、極めて重要なことになる。

§3 語彙のレヴェルにおいては、同義語の群における個々の語の潜在的可能性は、予め定められていることが多い。即ち相互間の相違は多く辞書により与えられているのである。しかしよく考えてみれば直ちに判明するように、辞書によって与えられているように見えるのは、実は現実の使用による相違が辞書に反映した結果にすぎない。使用のされ方が変ればニュアンスもまた変化せざるを得ないのである。

ここにおいて言語要素の使用のされ方とニュアンス乃至潜在的可能性との間の関係はどのようなものであるか、が問題となる。筆者はこれを媒介するものが異なる形態に異なる価値を賦与しようとする人間の本性であると考え。即ち同義語の場合のように知的意義はほぼ同一であるにも拘わらず形が異なる二つ以上の要素が存在する場合、人はこれに異った価値を与えようとするというのである。この価値賦与の働きによって本来は単なる偶然に過ぎなかったかも知れない使用上の相違が一定の意味を獲得し、異なる価値を生ぜしめることになる。

たとえば日本語には片仮名と平仮名という相異なる二つの標音文字体系がある。これらの文字体系は日本語の音を写すという点でその間に何等の価値の相違も存在せず、従ってその知的意味においては相等しいということができる。これらは第二次世界大戦を機にしてその使用を大きく変化させ、現在では片仮名の使用は専ら外来語、外国の地名、人名、擬声擬態語等に局限されている。戦前はこれに対して公的な文書などは専ら片仮名によ

て表記されていた。

このように知的意義を同じくし、形を異にする標音文字体系の存在は、言語主体たる日本人の集団的言語意識のうちにおのずからなる価値の相違を、これらの文字体系に賦与することになったと考えられる。その価値の相違を決定したのは、勿論これらの体系の使用における相違であった。戦後の状況で言えばこれは片仮名が専ら音声的なものとの結合を強める方向で行われたと考えられる。これに対して平仮名はむしろ意義と緊密に結びついていった。それは片仮名が外来語や擬声擬態語のように、音声的印象の鮮烈なものを表記することによって生じたものであると考えられる。

この結果たとえば「～なのでアル」などと書くと一種のコミックな印象を読者に与えるが、これは片仮名の使用によって意味内容ではなく、音的印象に注意を向けさせ、語り口を彷彿させるからである。あるいはまた詩人が「のすたるぢあ」などと書く時、これは音的印象を殺すことによって、その内容を印象づける効果をもたらしている。

以上が仮説の第二である。

§4 形態論のレヴェルにおいて知的意義を等しくし、形式を異にするものは言うまでもなく異形態 (allomorph) である。また詩においては、形式的な制約が大きいことから、異形態の選択には詩の形式による制約も無視し得ない条件になると考えられるが、そのような形式による制約を蒙らない場合には、全体としての制約の大きさが、却って散文におけるより異形態の意図化を鋭いものにすると考えられる。したがってここでは形式による制約を直接蒙らない異形態を考察の対象とすることになる。

そのようなものとしてここで選ぶのは副動詞である。ロシア語の副動詞には副動詞現在と副動詞過去がある。副動詞現在は通常不完了体動詞の現在語幹に語尾 -я を附加することによって作られる。чита- 「読む」に対する чита^я 「読みながら」である。これに対して副動詞過去は通常完了体動詞の過去語幹が母音に終る時は -в または -вши、子音に終る時はそのままあるいは -ши を附加することによって成る。たとえば прочита- 「読み終える」に対する прочита^{в(ши)} 「読んでしまつて」、прише^д- 「到着する」に対する прише^{дши} 「到着して」のような場合である。また -ся という要素をもっているいわゆる ся 動詞は、副動詞過去において ^вшись の形をとる。たとえば обня^тся 「抱合う」の場合は обня^ввшись 「抱合つて」となる。

以上のような正則の場合の外に不完了体動詞の過去語幹に -в(ши)(сь) を附加することによって作られる副動詞が少数ながらみとめられる。たとえば име- 「持つ」に対する име^{в(ши)} 「持つて」、служи- 「勤務する」に対する служи^{в(ши)} 「勤務して」などがこれである。

また逆に完了体動詞の現在語幹に -я を附加することによって副動詞が作られることもある。たとえば прочт- 「読み終える」に対する прочт^я 「読み終えて」というような場合である。

これを仮に **читать** 「読む」(不完了体)と **прочитать** 「読み終える」(完了体)という相関する二つの語をモデルにして示せば次のようになる。

	不完了体	完了体	
現在語幹	чита́я	про́чтя	
		(про́читая)	
過去語幹	*чита́в	про́читав	*は実際には認められないもの

§5 これらの形のうち **чита́я** と ***чита́в**, **про́чтя** と **про́читав** は夫々知的意義を等しくする異形態であるとされている。

これらの形態の使用における相違を明らかにする上で、詩の形式による選択の可能性を除去するために、次のクリテリアを設ける。

1. 異形態の音節数が相等しいこと。
2. 音節数と同時にアクセントの位置が等しいこと。
3. 詩行の末尾に位置しないこと。

プーシキンの詩の大多数はいわゆる音節音調詩であるから、各詩行の音節の数は予め定まっている。従って音節数の制約が音節数を異にする異形態の一方を選択させる可能性の存在することを否定できない。クリテリアの第一はこのような可能性を除去するためのものである。

一方音節数が等しい場合でもアクセントの位置が相違すればヤンボス、トロカイオスなどの格調の要求によってそれに適合する何れか一方の異形態を選択する可能性がある。クリテリアの第二はこのような場合を想定して置かれる。

最初の二つのクリテリアを満たしているものでも、それが詩行の末尾にあれば、脚韻の必要によって何れか一方の異形態が選択される可能性がある。これを避けようとするのが第三のクリテリアである。

異形態の使用がこれら三つの条件をすべて満たしているならば、その選択は文体的契機もしくは意図化の結果であると考えても差支えないであろう。

例えば上述の **чита́я** と ***чита́в**, **про́чтя** と **про́читав** とは第一のクリテリアによって除外される。一方プーシキンは ***чита́вши** の形式も使用しているから、この形式を考えればクリテリア 1 の条件は満たされる。しかしながら ***чита́в(ши)** の形式は既に述べたように極めて少数の例にしか認められない。従って **чита́я** と **чита́вши** は同等の蓋然性をもって選択されるということはない。換言すれば **чита́я** を用いている場所のすべてにわたってこれを ***чита́вши** に置換える可能性は存在しないが、逆の場合、即ちもし ***чита́вши** が使用されているならば、これを **чита́я** に置換することは可能である。即ち **чита́вши** は **чита́я** によって置換可能であるが、逆は成立たないのである。

これをいま ***чита́вши** $\Rightarrow$ **чита́я** と表わすことにする。一般に $A \Rightarrow B$ であるとき、 A

が使用されているならば、A は強い意図化を蒙っているとみるべきである。そのような強い動機が存在しないならば、このような比較的稀な形式が選択されるとは考えられないからである。

これに対し *прочитя* は比較的よく使用されているから、*прочитав* とは相互に置換可能である。これを *прочитя* ⇔ *прочитав* と表示することにする。

また例えば *пройти* 「通り過ぎる」は副動詞現在 *пройдя*、副動詞過去 *прошедши* であるが、後者はまた *прошед* という別形も持っている。*пройдя* と *прошедши* は相互に置換可能であるが *прошед* は *прошед* ⇒ *пройдя* である。クリテリアの 1 と 2 とを満しているのは *прошед* と *пройдя* であるから、ここで問題となるのは *прошед* のあらわれる場合であるということになる。

ここで *читаю* のように不完了体動詞から作られる正則の副動詞現在を不完了副動詞現在、同じく *прочитав* のように完了体動詞から作られる正則の副動詞過去を完了副動詞過去と名付け、**читав(ши)* の型を不完了副動詞過去、*прочитя* の形を完了副動詞現在と称することにする。

§6 さてプーシキンの詩について実際にこれらの異形態の使用について見て行くことにする。

まず不完了副動詞現在と完了副動詞現在についてみればこれは感覚動詞にあらわれることが多い。たとえば、

Так зайчик в о́зимѣ трепещет,
Уви́дя вдруг изда́лекѣ
В кусты́ припа́дшего стрелка́.
(Евг. Онег. 3-40-13)

丁度突然遠くから
茂みに落ちて来た矢を見て
うさぎが秋蒔きの作物の中で
ふるえているように

これに対し対応の *увидев* は

У трона́ в дворце́ стоя́ла
Мари́ана
И бе́дный Кла́вдио. Злоде́й,
увидев их,
Затрепетáл, чело́м поникну́л
и ути́х;
Все объясни́лося, и пра́вда из
тума́на Возни́кла;
(Анж. 3-4)

宮殿の玉座のそばにマリアナと
あわれなクラウディオが立って
いた
悪者はそれを見てふるえ始め
頭をたれて黙った。すべては
明らかになり真実がもやの中
から立ち現われた

この両者の相違は *уви́дя* が「突然見て」のように著るしい感覚性を持っているのに対し、*увидев* はそのような感覚性を持っていない。詩行末にある為にクリテリアの 3 を満していないが、次のような例もこれによく似た状況を示している。

Вдруг уви́дя
Младой двуро́гий лик луны́
На небе́ с ле́вой сторо́ны,
Она́ дрожа́ла и бледне́ла,
(Евг. Онег. 5-5-12)

突然、
空の左の方に
利鎌のような上弦の月を見た
ときに
彼女はおののき、色蒼ざめた。

これはオネーギンの 5 章の 5 節と 6 節の間にまたがっているもので、いわゆる enjambement を持っている。このような連の間の転行は極めて強い印象をもたらす効果を持つとされている。この場合には「彼女はおののき、色蒼ざめた」という箇所が強い印象性をもたらしているのである。すると前の連に含まれていること、即ち彼女が「突然空の左の方に利鎌のような上弦の月を見た」ことが連の間の転行をもたらす程に重大なことがらであったということになる。これについては曾つて法橋和彦氏が書いていたが、彼女の不吉な夢が現実になるという月の占いであったと考えられよう²。

このようなものであったことから уви́дя も強い感覚性をもっていたということができよう。そしてここにも「突然」という副詞が伴われているのである。

§7 同じようなものとして заме́тя と заме́тив 「みとめて」が挙げられる。これも 1 と 2 のクリテリアを満たしている語である。たとえば、

Чуда́к, по́пав на пи́р о́гро́мный,
У́ж был се́рдит. Но, де́вы
то́мной
Заме́тя трепе́тный порыв́,

この変わり者は、大宴会に出くわ
して
もう腹を立てていた。だが悩める
乙女の

С до́сады взору́ опустив́,
Наду́лся он и, него́дуя,
Покля́лся Ле́нского взбеси́ть
И у́ж по́рядком отомсти́ть.
(Евг. Онег. 5-31-7)

発作に気がつく
怒りの余りに目を伏せて
ふくれ面して不満気に
レンスキーを怒り狂わせ、したた
かに
仕返ししようと誓ったものだ。

Заме́тив, что Влади́мир скры́лся,
Оне́гин, ску́кой вно́вь гони́м,
Близ О́льги в ду́му погру́зился,
Дово́льный мще́нием своим.
(Евг. Онег. 6-1-1)

オネーギンはヴラヂーミルが
姿を消したのに気がつくと
また退屈の虫におそわれて
オリガのそばで思いに沈み
仕返しに満足していた。

²法橋和彦「続ペテルブルグ＝レニングラート古書雑話(其六) — プーシキンと夢占いのことども(上)」『窓』No.38(1981年5月)、51-57頁。

この場合にも明らかに *заметья* は *заметив* に較べて感覚性が高い。*заметья* はいわゆる「片仮名」のように事態を感性的にとらえているのに対し、*заметив* は「平仮名」のようにむしろ意味に結びつき、背景の説明に近い。これは *заметив* は副文章を伴っていることによっても明らかである。

§8 これに対して *услышать* 「聴き取る」の場合には詩に用いられているのは *услыша* の形だけであって、*услышав* の形は散文に限られている。この場合にも *услыша* の形は必しも詩の形式の制約によるものではない。たとえば、

Но вѣтязь знаменитый,
Услыша грубые слова,
Воскликнул с важностью сердитой:
(Рус. и Люд. 3-276)

しかし高名な勇士は
ののしり言葉を聞くなり
怒りを含んで重々しく叫んだ。

これらは3つのクリテリアのすべてを満たしている例である。またこれはルスランが荒野に横わる首との闘いを行う場面であって、生彩に富んだ描写によって特徴づけられる。

§9 以上のようにいわゆる感覚動詞とされるものに完了副動詞現在が多く用いられることは、この形式が高い感覚性を持っていることにその原因があると思われる。

従って例えば感覚動詞に属する *видеть* 「見る」の完了副動詞 *видев* が *видя* の代りに用いられたとすれば、*видев* ⇒ *видя* であるだけに、極めて特異な現象と考えられる。たとえば、

Оправиться успѣв
“Она помѣшана, — сказа́л
он, — *ви́дев* брата
Приговорѣннаго на смѣ́рть.
Сія́ утра́та
В ней ра́зум потрясла́...”
(Андж. 3-4-16)

身をкаろうじてたてなおし
彼は言った「この女は
弟が死を宣告されたのを見て
気が触れたのです。この損失が
彼女の理性を狂わせたのです。

これは3つのクリテリアのすべてを満たしており、「気が触れたこと」の背景の説明になっている。

§10 感覚動詞に次いで動詞で感覚性が高いとされるのは身体の動きに関するものである。この群の動詞のうち上述の第一と第二のクリテリアを満足するものは *поту́пя/поту́пив* (взор) 「(目を)伏せて」、*зажиму́ря/зажиму́рив* (очи) 「(目を)細めて」などであるが、プーシキンの詩の中では何れも完了副動詞現在の形しか用いられていない。たとえば、

Пока вдали
Зарецкий наш и честный малый
Вступили в важный договор,
Враги стоят, потупя взор.
(Евг. Онег. 6-27-14)

遠くの方で
わがザレツキーとあのいい奴が
大切な打ち合わせに入っている
あいだ、
双方目を伏せて立っていた。

Напрасно конь, зажиму́ря
óчи,
Склонив главу́, нату́жа гру́дь,
Сквозь вихо́рь, до́ждь и сýмрак
но́чи
Неве́рный продолжает пúть.
(Рус. и Люд. 3-291)

いたずらに駒は目を細め
頭を垂れて胸を反り
つむじ風、雨や夜のやみを縫って
覚束ない旅をつづけていく。

§11 その他の例としては、例えばつぎのようなものが挙げられよう。

Так, разврати́
Я долго́ был покорный учени́к,
Но с той поры́, как вас
увидел я́,
Мне ка́жется, я весь перероди́лся.
Вас полю́бя, люблю́ я до-
бродетель
И в пе́рвый раз смире́нно
пе́ред не́й
Дрожа́ние ко́лена прекло́няю.
(Камен. гость 4-98)

私は久しく法統の忠実な弟子で
した
けれどあなたに会ったあのとき
から、
私はすっかり生まれ変わったよう
に思われます。
あなたを愛してしまつて
私は徳を愛し、はじめて
その前に震える膝をつくのです。

Вы у́зами не связа́ны святы́ми
Ни с кéм. — Не пра́вда ль?
Полю́бив ме́ня,
Вы предо мно́й и пе́ред не́бом
пра́вы.
(Камен. гость 4-40)

あなたは誰とも神聖な
結びつきによって結ばれては
いません。そうでしょう。
私を愛しても
貴方は私と天に対して恥じること
はありません。

最初のものはドン・フアンがドンナ・アンナを口説く箇所であり、激情のほとばしりを感じさせるが、後者はドンナ・アンナの言葉であって、平静で論理的内容である。полюбяと полюбивはこの違いによく対応していると言うことができる。

§12 感情の昂ぶりを示す箇所と平静な語り口との相違は、次の不完了副動詞現在と過去の対比にも認められる。

(Всыпает деньги)
 Ступáйте, пóлно вáм по свéту
 ры́скать,
 Служá статáм и нúждам че-
 ловéка.
 Уснiте здéсь сном сiлы и
 покóя,
 Как бóги спя́т в глубóких
 небеса́х ...
 (Скупой Рыцарь, 2-72)

さあお前たち人間の欲望や必要に
 仕えて
 世の中をとびまわるのはもう沢山。
 神が空の深みで眠るように
 力とやすらぎの夢をここで夢みる
 がいい.....

Служи́в отлiчно благо́рдно,
 Долгáми жи́л его́ отец,
 Давáл три ба́ла ежегóдно
 И промотáлся наконéц.
 (Евг. Онег. 1-3-1)

優れて高潔につとめあげ
 彼の父は負債で暮らしていた
 毎年三度舞踏会を催して
 挙句の果に破産した。

後者が背景の事情説明になっていることは明らかである。

§13 以上詩の形式の語形の選択に対する介入を完全に排除するために三つのクリテリアを設定し、考察を行って来た。しかし乍らこのクリテリアは極めて厳格なものであって、詩の創作の過程を想定すれば、実際はもっと緩やかな条件を考えてもよいと思われる。たとえば実際には音節数あるいはアクセントの位置が異なる異形態であっても、一方を選択したい時には同一詩行中の他の語を別の語によって変えることによって詩行中の音節数を揃えることは十分に可能だと思われるからである。このことは脚韻についても言うことができる。

ここで示したかったのはこのような厳格なクリテリアを導入してもなお上述の異形態の間には一定の傾向を持った使用上の相違が認められるということである。

上述のクリテリアの少なくとも二つを満すものというように条件を緩めれば資料は飛躍的に増加するが、その場合にもこれまで述べて来た内容から基本的に外れることはない。このことは異形態の選択の理由づけを専ら詩の形式の制約に求めようとする方向が正しくないことを示すものであると言える。プーシキンは詩人のすぐれた感覚をもってこれらの異形態の間の表現価値の相違を鋭く感じとり、それを自己の作品の中に生かしていたと、結論づけることができるのである。